



『子育て支援 制度と現場 よりよい支援への社会的考察』

評者・小谷 博子 東京電機大学先端工学研究所、育児工学者

本書は、今まさに子育てま
っただなかの社会学者た
ちにより書かれたものであり、
編者の白井氏は3人の男児、も
う1人の岡野氏も3人の子ども
を育てる母親研究者である。著
者たちは、個人的な体験を手が
かりに子育てや保育園のフィー
ルドワークを進め、現代社会に
おける子育て支援の社会的あり
ようを明らかにしている。

私は、著者の自らの妊娠・出産
経験から始まるところに特に心
を揺さぶられた。第1子の出産か
ら、病院ではなく助産院を選び
満足のいくお産を経験し、「保育園
に預ける」ことはせずに、仕事
と子育ての両立を自分1人で限
界まで頑張り続けるのである。「これまで積み
上げてきたキャリアを子育てを理由に断念する
ことはしたくない」という著者の子育てと仕事の
狭間に揺れる気持ちが痛いほどよくわかった。

「子どもを人に預けること」に対して罪悪感
を感じていた著者が、「育児ノイローゼ」を経
験し、「子育ては1人ではできない。子どもの
ためにも保育園に行ったほうがよい」と考え方
が変わっていくのである。この考え方の変化
が、著者が本書を執筆するうえでの原動力にな
ったに違いない。

男女雇用均等法が施行されて20年が経ち、
女性が働くことは当たり前となった昨今、少子
化の原因は、「女性の高学歴化や社会進出」と、
これまで当然のごとく考えられてきた。しか

子育てしやすい国になるため にはどのような支援が必要か



白井千晶・岡野晶子 編著
定価 2625 円 (本体 2500 円 + 税 5 %)
A 5 判 / 新泉社 / 2009 年

し、筆者はそれだけが原因では
ないと主張している。むしろ、
「第1子の出産を機に退職する
女性の割合が高く、学歴が高い
女性ほど、復職しないで専業主
婦でありつづける傾向が高い」
というのだ。

その理由は3つあるという。
まず1つが、「女性労働力が周縁
化しているために、復職しても以
前と同じような労働形態・地位・
収入は手に入られず、高学歴
女性ほどそのギャップが大きく
て見合わない」。2つ目は「現代
社会でも同類婚が大勢を占めて
いるから、高学歴女性は高学歴
男性と結婚しがちであり、その
ため世帯収入が高いために働く

必要がない」。3つ目は、「女性は自らの資本を
子どもへの投資(教育)に費やす」ということ
である。これらの視点はこれまでの子育て支援制
度のうえで考慮されてこなかった点であろう。

出産・子育ては女性にとって、大きなターニ
ングポイントである。だからこそ、女性たちが
多様な働き方や生き方を選んでも、子育て支援
を受けられることが、一番の少子化対策である
と本書を読んで強く感じた。

本書では、子育て支援の現状を整理し、国・
自治体が進める少子化対策と子育て支援政策が
まとめであり、これも非常にわかりやすい。子
育て支援に携わる人だけではなく、お産の現場
や子育て中の女性たちにも手に取っていただき
たい1冊である。